

原発事故が生んだことば

遠藤 織枝

はじめに

2011年3月11日、大地震と巨大津波により、東京電力福島第一原発は大きな損傷を受けた。その結果、大量の放射能を漏出し、多くの住民の生活を奪い、8か月を経過した11月現在でも収束の見通しは立っていない。このような危機的で深刻な事故をかつて経験したことがない日本人にとって、次々に起こる新しい事態を捉え、刻々と変わる状況を伝えることばは、耳新しく目新しいものであった。従来の日本語では表現しきれない異常で新奇な事態の出来に遭遇していたのである。

「除染」「炉心溶融」「炉心損傷」「輪番停電」「被曝線量」「汚染水の除去」「水棺」「シルトフェンス」「ウェットベント」「ホットスポット」「メガフロート」などなど、今まで日常生活で触れることのなかったことばをマスメディアは流し続けた。

本稿では、こうして日本語に新たに加わった語彙のいくつかを取り上げ、その定着の過程を検証しながら、これらの語彙が今後の日本語にどのような影響を持つことになるかを考えようとしている。表題を「原発事故が生んだことば」としているが、これらの語彙の中には、原発事故以前から存在して使われていた語もあり、全く初めて誕生した語とは言えないものも含まれている。またいつの時期を以て誕生とするかも議論の余地がある。辞書もいくつかの段階があるので、ここでは最も採録語数の多い大型辞書として『日本国語大辞典第2版』（以下『日国』）、中型辞書として『大辞林第3版』（以下『大辞3』）、『広辞苑第6版』（以下『広辞6』）、最新の小型辞典として2011年に刊行された『新選国語辞典第9版』（以下『新選』）と、『三省堂現代新国語辞典第4版』（以下『三現国』）を参照する。また新語辞典として『現代用語の基礎知識2011年版』（以下『基礎』）を参照する。

用語用例を採集したのは、

『朝日新聞』2011年3月12日～2011年6月30日（『朝日』と略記）

『毎日新聞』2011年3月12日～2011年6月30日（『毎日』と略記）

『讀賣新聞』2011年3月12日～2011年6月30日（『讀賣』と略記）

のそれぞれ東京本社最終版と、

電子版『聞蔵』（朝日新聞社）2011年3月12日～2011年6月30日

電子版『ヨミダス』（讀賣新聞社）2011年3月12日～2011年6月30日

である。

1. 「除染」

まずこの語の辞書の採録状況を示す。

表1 「除染」の採録状況（○は採録、×は未採録を示す）

辞書略名	『三現国』	『新選』	『大辞3』	『広辞6』	『日国』	『基礎』
刊行年	2011年2月	2011年1月	2006年	2008年	2001年	2011年
採録状況	×	×	○	○	○	×

中型以上の辞書には採録されているので、これらの辞書の前の版についても調べてみると、『大辞林』では第2版（1995）にも採録されているが、初版（1988）には採録されていない。『広辞苑』では、第5版（1998）にもそれ以前の版にも採録されず、『日国』は初版（1972）には採録されていない。なお、漢和辞典で最も語数が多い『大漢和辞典』（修訂第2版第2刷1991）にも収録されていない。つまり、辞書にこの語が初めて登場するのは、1995年ということになる。

この語は、米国スリーマイル島原発事故（1979）、旧ソ連チェルノブイリ原発事故（1986）、東海村の事故などの後で使われ始めた。それを『大辞林第2版』が取り入れ、『日国第2版』『広辞苑第6版』がそれに続いたという図式である。今回参照した2種の小型の辞典には、まだ認知されていない。

今回採集した例を以下に示す。当該の用語をイタリック体で示す。以下、例の後の（ ）内は、紙名、掲載月日、掲載ページで、夕刊の場合は「夕」

と記した。

[1] 福島県が被曝したと発表した3人は福島第一原発同県双葉町の双葉厚生病院の患者や職員とみられる。[……] 3人とも除染しなくてはいけないという。(『朝日』3.13p.1)

[2] 放射性物質を体表面から除去する「除染」が必要と診断され[……] (『讀賣』3.13 p.1)

どちらも3月13日の第1面の記事だが、[2]は「除染」と「 」をつけて、しかもその前に「放射性物質を体表面から除去する」という、除染の意味を説明している。[1]は「 」もつけず、地の文の中に取り込んだままですべて使われている。一般に、新しい用語で読者になじみがないと思われる語を使うときは、[2]のような扱いがされるのであるが、[1]の記者やデスクにはそのような余裕もなかったのであろう。

その後の記事では『朝日』も「 」をつけたり、説明を加えたりした例が出てくる。

[3] シャワーで洗い流したりして「除染」を行うことが必要だ。(『朝日』3.15 p.12)

また、同一文の中で複数回使われる時は「 」は記事の初めに使われるときにだけつけられ、2度目からは外されるのが普通で、以下の例のような扱いになる。

[4] 測定の結果、放射能を洗い流す「除染」作業が必要とされた住民は、圏内の2、3箇所に集約して除染を行う。(『讀賣』3.14 p.20)

読者になじみのない用語であると判断されて、「 」をつけたり説明を補ったりして使われていくうちに語の理解が進んだと思われる、そうした補足の扱いはなくなる。また、理解が進むと、複合語の構成要素として用いられるようになり、造語の状況からも語の独立化の過程をみることができる。その例として「除染」を要素とする複合語に「除染作業」があるが、この複

合語も当初は「 」でくくられているが次第に「 」は外されるようになる。

この語は3月、4月の段階では、①除染作業（『朝日』3.17p.1）と、②「除染」作業（『讀賣』3.13 p.1、『朝日』3.25 p.21、『朝日』4.01夕p.15）とが混在しているが、4月中旬以降は②の示し方の「 」つきのものはなくなり、①の「 」なしの形のみとなる（『朝日』4.01 p.2、『朝日』5.03 p.8、『讀賣』5.24 p.34）。さらに、除染費用（『朝日』4.23 p.3）、除染装置（『讀賣』6.16 p.1）除染実験（『朝日』6.20 p.13）土壌除染（『讀賣』6.28 p.4）のような複合語が登場する。このような造語出現の過程からも、「除染」の語が理解され独立して使われるようになる過程を見ることができる。

こうして、認知度が高まってくると、単独使用の時も「 」は使われなくなる。『讀賣』では、4月28日の以下の例、

- [5] ペットの被曝線量が高い場合はシャワーで全身を洗い流す「除染」を行うこともあります。（『讀賣』4.28 p.38）

を最後に、『朝日』では、5月13日の以下の例を最後として、「 」つきの用法はなくなる。

- [6] 放射性物質を落とす「除染」が必要な人や気分の悪い人はいなかった。（『朝日』5.13 p.38）

一方で、「 」がつかなくても、[2]のように、語の前に説明をつける用法はまだ存続する。（説明部分の下線 遠藤）

- [7] 農家が水や洗剤で放射性物質を落とす除染を繰り返す。（『朝日』4.23 p.9）

- [8] 水で洗い流す除染作業が[……]（『讀賣』6.01 p.12）

などである。こうした扱いも、「除染」の語が定着すれば必要ではなくなる。

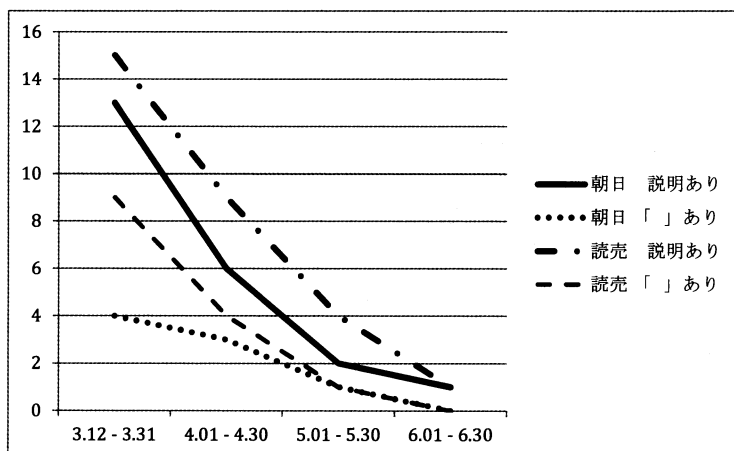
- [9] 土壌の除染をどうする方針なのか。（『朝日』6.21 p.36）

- [10] 校庭の表土を[……]保護者と教員が除染した。（『讀賣』6.11

のように、「」も説明も補わずに使われることになる。『讀賣』では6月2日以降の記事から、『朝日』では5月13日以降の記事から、「除染」が普通に使える語として独り立ちして歩み始めたことになる。

このような推移を図示すると以下ようになる。

図1 「除染」の扱いの推移



次に、使われる際の語義の推移について考える。

当初の「除染」は

[11] 3人を検査したところ、除染ですむ程度の被曝をしていた。(『讀賣』
3. 13 p. 1)

のように被曝した人体に付着した放射性物質の「除染」が中心であったのが、5月以降になると、人体に関するものは全く現れず、専ら「土壌」「校庭」「通学路」など放射性物質の降り注いだ土地の「除染」へと、放射性物質を洗い落とす対象が変化してきている。収録している辞書の語釈は以下のとおりである。

【除染】

『広辞6』放射性物質や有機化学物質による汚染を取り除くこと。

『大辞3』放射性物質で汚染された衣服・機器・施設から汚染を除去すること。

『日国』放射性物質の散逸などで汚染された周辺の施設や機器から、放射性物質を取り除くこと。

何についての放射性物質を除染するかについて、『広辞6』は触れていないが、『大辞3』は「衣服・機器・施設」と明記し、『日国』では「周辺の施設や機器から」と記す。実際のこの語の使われ方をみると、『大辞3』の記述が最も実情に即しているということになる。

2. 「廃炉」

まず辞書の採録の状況を示す。

表2 「廃炉」の採録状況（○は採録、×は未採録を示す）

辞書略名	『三現国』	『新選』	『大辞3』	『広辞6』	『日国』	『基礎』
刊行年	2011年2月	2011年1月	2006年	2008年	2001年	2011年
採録状況	×	×	○	×	×	○

『大辞3』と『基礎』にのみ、採録されている。『大辞林』は第2版にも収録されているが、初版には採録されていない。『基礎』をさかのぼってみると、この語の扱いがいくつかの曲折を経ていることがわかる。「廃炉」が最初にこの新語辞典に登場するのは1980年版で、以下のように記述されている。

廃炉（decommissioning） 耐用年数を過ぎたご用済みの原子炉。内部に放射性物質を抱えているので、そのまま廃棄処分にできない。資源エネルギー庁で廃炉処分の安全基準などを検討中。[……]

81年版も同様の記述である。82年版は、「新語話題コーナー」という囲み記事にされている。記述内容は最後の部分を除いてほとんど変わっていない。

83年版は81年版と同じく普通の欄の扱いで、記述の内容は後半3分の1ぐらいの部分が新しく書き換えられている。86年版になると、82年版のような囲み扱いだが、囲みの名称は「最新重要語コラム」となり、項目名も「原子炉廃止措置」と変わった。

原子炉廃止措置 (decommissioning) 耐用年数を過ぎたご用済みの原子炉の対策。従来**廃炉**と読んでいたが、イメージチェンジのため名称を変えた。内部に放射性物質を抱えているので、そのまま廃棄処分にできない。国際的に検討されているのは[……]

と、項目名を「廃炉」から変えた理由も記されている。確かに「廃炉」はイメージがよくない。89年版も90年版も同じ項目名で内容も変わらない。90年版にはさらに「最新キーワード」というコラムに「廃炉引当金」という新たな項目が立てられた。

廃炉引当金 (security fund for waste reactor) 電力会社が寿命の尽きた原子力発電所の原子炉を廃棄するために積み立てておく引当金。

92年版から97年版までは、「原子炉廃止措置」の項目で内容もほぼ同じである。「廃炉引当金」の項目はなくなっている。98年版になると項目名が変わり、「**廃炉／原子炉廃止措置**」となって、今度は「新傾向・新問題」という名称のコラムに入れられる。99年版も同じである。そして、翌2000年版はまた項目名が変わり、「**廃炉 (原子炉廃止措置)**」となる。14年ぶりに「原子炉廃止措置」が表面から退いて「廃炉」を中心とする項目名になった。内容は99年版とは最後の1段落が変わっている。01年版では、前年度と同じ項目名で、内容では最後に廃炉費用が付け加えられた。

03年版からはまた、見出しが変わり、「廃炉」が姿を消して「原子炉解体」となった。英語訳は「廃炉」のときと変わっていない。

原子炉解体 (decommissioning) 耐用年数を過ぎたご用済みの原子炉の処分。日本原子力発電会社の東海原子力発電所 ([……]) が商業

炉解体の第1号。[……]これまで廃炉になったのは日本原子力研究所の研究1号炉と動力試験炉である。

ここでは、「廃炉」のことをいっているのに項目名からはそのことばが消されている。また、この年の扱いでは文章量が少なくなった。01年版は448文字だったところ、224文字に減り、ちょうど半分になった。その後10年版までこの見出しが続くが、記事量は10年版には336字と、やや戻った。そして、今年11年版には項目名が「原子炉解体（廃炉）」となり、見出しの（ ）に「廃炉」が戻ってきた。内容は10年版と全く同じであった。

なんとしても「廃炉」の語は使いたくなくて、いろいろ言い方を変えてきた歴史を見てきた。見出し語のことばをあれこれ変えてはいるが、（ ）内に示される英語が全く変えられていないことから、実態よりも表面のことばの操作であることがわかる。また、扱いの軽重は社会の反映であり、そのときどきの日本社会の原子炉に対する政策や関心のあり方を読み取ることができた。

さて、「廃炉」の語の今年3月11日以降の使用状況を見ることにする。

[12] 2、3号機を廃炉にする覚悟で早急に思い切った対応をするべきだった。（『讀賣』3.15 p.7）

[13] 廃炉覚悟で踏み切った。（『朝日』3.16 p.13）

など、最初から説明も「 」もなしで使われている。「 」でくくられたのは、わずかに次の3例であった。

[14] 「廃炉」案を主張する声もある。（『朝日』3.29 p.6）

[15] 見出し：福島第一原発「廃炉」の見通し（『讀賣』3.21 p.6）

[16] 「廃炉」を初めて明言した。（『讀賣』3.31 p.1）

これらの例は廃炉の語そのものが新しくて際立たせたいというのではなく、だれかの発言を引用するために「 」がつけられたとみるほうが妥当であろう。

「廃炉」の語は事故発生直後から、収束の見通しや他の処置とのかねあい
で多く使われたが、それらは意味は理解されているものとして、初めから説
明も「 」もなしで使われてきた。辞書には採録されていなくても、「廃」
の字は、「廃車」「廃品」「廃棄物」「廃案」「廃業」「廃止」など日常多く目に
するので、「廃炉」が何を意味するか、およその意味は類推できるからであ
ろう。

ただし、この語の実際使われている意味は辞書の記述とは異なっている。
『大辞3』には「寿命を迎えた原子炉」と記述されている。役目を終えた原
子炉の状態として説明されている。しかし、実際に使われる「廃炉」は、「廃
炉の可能性が高い」(『讀賣』3. 29 p. 1)、「廃炉を決断した」(『讀賣』3. 31 p. 3)、
「廃炉を進める」(『朝日』4. 14 p. 5)、「廃炉に追い込まれる」(『朝日』5. 18 p. 11)
など、原子炉を廃物にするという動作・行為を表す語として使われている。
すでに運転を中止して20年も経ている原子炉であれば、『大辞3』の語釈で
かまわないのだが、今回の事故によって決断されたり進められたりする「廃
炉」は、被害の拡大を防ぎ、事故を収束させるための手段であり行為を意味
している。こうした意味で使われたことから、今後の辞書の語釈には行為を
意味する語義の記述が必要となるだろう。

3. 「炉心溶融・メルトダウン」

この2語の辞書の採録状況は以下のとおりである。

表3 「炉心溶融」「メルトダウン」の採録状況 (○は採録、×は未採録を示す)

辞書略名	『三現国』	『新選』	『大辞3』	『広辞6』	『日国』	『基礎』
刊行年	2011年2月	2011年1月	2006年	2008年	2001年	2011年
炉心溶融	×	×	○	○	○	○
メルトダウン	○	×	○	○	○	○

「炉心溶融」は、小型辞書には採録されていないが、中型以上の辞書には
採録されている。『広辞6』と『大辞3』は「炉心」の語の追い込み項目と

しての扱いであるが、『日国』は「炉心溶融」として項目を独立させている。また、3辞書とも「炉心溶融」の語の語釈の最後に「メルトダウン」と記され、言い換え語であることを示している。『基礎』は「炉心溶融」の原語を「nuclear core melt」としていて、メルトダウンを同義語としてはいない。まず、「炉心溶融」の新聞での使われ方をみる。この語は、以下の例に示すとおり、さまざまな形式の組み合わせで使われている。

[17] 冷却水が失われて最悪の場合炉心溶融につながる。(『朝日』3.12
夕p.12)

『朝日』の最初の例だが、ここでは「炉心溶融」の概念についての説明はされていない。

[18] 核燃料は金属の被覆で覆われており、チェルノブイリ原発で起きたような炉心溶融（メルトダウン）まで発展する可能性は高くない。
(『讀賣』3.12 p.3)

『讀賣』ではメルトダウンという外来語を言い換え語として（ ）内に入れているが、その意味は説明されていない。

「 」に入れたり、概念を規定しながらこの語が使われるものもある。

[19] 原子炉内の核燃料が溶け出す「炉心溶融」も起きた可能性が指摘されている。(『讀賣』3.13 p.3)

[20] 原子炉内の燃料集合体の一部が融熱で溶ける炉心溶融が進み過酷事故に発展する恐れがある。(『讀賣』3.13 p.1)

[19]では「原子炉内の核燃料が溶け出す」という修飾句で「炉心溶融」を説明している。[20]は、「炉心溶融」の前に「原子炉内の燃料集合体の一部が融熱で溶ける」という連体修飾句がきて、「炉心溶融」の概念を説明している。しかも[19]は、この語を「 」でくくることで、読者にとって新しいなじみのない語であることを示している。

これらがたびたび紙面に登場し、言い換えや説明がなくても理解されると

判断されるようになると、以下の[21]のように「 」も説明もつかなくなる。

[21] 実施されたのは炉心溶融が起きた後だった。(『読賣』5.17 p.3)

こうした「 」の有無や、言い換え語の有無で、まとめると、以下の4種類になり、それぞれが、また説明の有無で分けられる。

- ① 炉心溶融」と「 」がつけられているもの。
- ② 「炉心溶融(メルトダウン)」と、言い換え語メルトダウンとともに「 」に入れられているもの。
- ③ 炉心溶融が「 」なしで使われているもの。
- ④ 炉心溶融(メルトダウン)が「 」なしで使われているもの。

また、「炉心溶融」がキーワードなどとして解説される例もあるので、それも加えて、3月から6月までの新聞別の使われ方をまとめて表にする。

表4 「炉心溶融」の語の使われ方

使われ方		3月	4月	5月	6月	計
① 「炉心溶融」 説明アリ	『朝日』	1	0	0	0	1
	『読賣』	3	1	0	0	4
① 「炉心溶融」 説明ナシ	『朝日』	3	0	0	0	3
	『読賣』	1	0	3	0	4
② 「炉心溶融(メルトダウン)」 説明アリ	『朝日』	0	0	0	0	0
	『読賣』	1	0	3	0	4
② 「炉心溶融(メルトダウン)」 説明ナシ	『朝日』	0	0	0	0	0
	『読賣』	0	0	0	1	1
③ 炉心溶融 説明アリ	『朝日』	8	3	6	0	17
	『読賣』	4	0	3	0	7
③ 炉心溶融 説明ナシ	『朝日』	24	12	20	8	64
	『読賣』	26	2	26	12	66
④ 炉心溶融 (メルトダウン) 説明アリ	『朝日』	0	1	1	1	3
	『読賣』	0	0	0	0	0
④ 炉心溶融 (メルトダウン) 説明ナシ	『朝日』	1	0	5	1	7
	『読賣』	1	0	10	1	12
⑤ 炉心溶融・解説	『朝日』	2	0	1	1	4
	『読賣』	1	0	0	0	1
	『朝日』計	39	16	33	11	99
	『読賣』計	37	3	45	14	99
総計		76	19	78	25	198

偶然ではあるが、本調査期間中の『朝日』と『讀賣』両紙に出現した「炉心溶融」の語はいずれも99語で同数であった。この語が3月から6月にかけて使われる中で時期によって使用数が異なるのは、「炉心溶融」という事態の起こる時期と併行している。すなわち3月と5月に多いのは、事故発生当時その危険が最も大きいとされた時期と、その事実が明らかにされた時期にこの語の使用が集中しているからである。

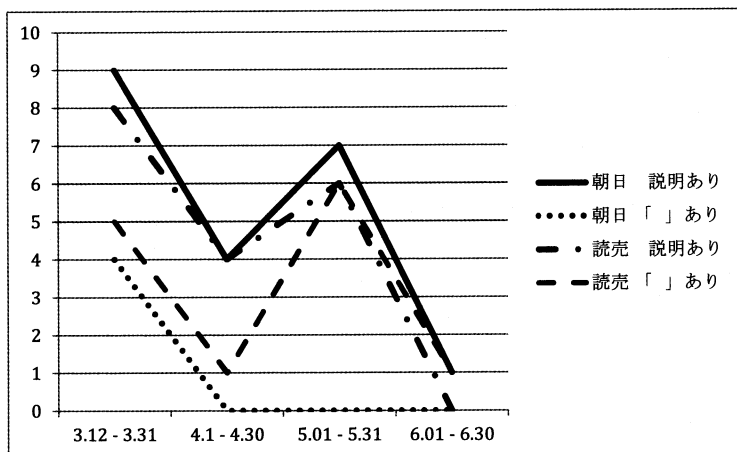
新聞報道としては、上記「除染」と同様に、この語の周知度をはかりながら、説明を加えたり言い換え語を加えたりしていき、周知されたと判断されると、「 」も説明もなくなり、単独で使われるのが普通の流れだが、その流れはこの語に関しては、『朝日』と『讀賣』とではやや様相が異なっている。

「 」をつけてその後を際立たせる—まだ認知されていないと判断される—一用法が、「炉心溶融」で『朝日』は4例に対して『讀賣』は倍の8例、「炉心溶融（メルトダウン）」と言い換え語とともに「 」でくくるのが、『朝日』は0に対して『讀賣』は5例使われている。また、記事中で説明を加えるか、自明のこととして説明を加えないかでみると、「 」の有無に拘わらず、説明とともに用いるのが『朝日』で25例、『讀賣』で16例である。このことは、『讀賣』は記号で際立たせることでこの語の新しさを示す扱いが多いのに対して、言葉による説明をするのは『朝日』のほうが多いということになる。『朝日』は6月になっても、言葉による説明を加えながら報道する例があるのに対して、『讀賣』は6月になると、いっさい説明を加えなくなる。

『讀賣』は、当初は『朝日』より多く「 」をつけて、語の新しさを示してきたが、読者に理解されたとする判断は『朝日』より早くなされたと考えられる。このような変化を図示すると次ページのようになる。

また、外来語「メルトダウン」との併用の例をみると、「炉心溶融（メルトダウン）」と記して、外来語で補足する例は「炉心溶融」の語例198の中の27例にみられた。その内訳は『朝日』10例に対して、『讀賣』は17例で、『讀賣』のほうが多かった。難解な語である「炉心溶融」に外来語を補足することで理解の助けになるとする考えが、『讀賣』のほうに多かったということである。

図2 「炉心溶融」の扱いの推移



次に「メルトダウン」に移る。炉心溶融と同じような使われ方のバリエーションが見られる。

[22] ドイツの環境研究所原子力技術部門研究員のクリストフ・ビストナー氏は「こうした事態では通例考えられる緊急手段だ。放射性物質は外に出るが、メルトダウンという最悪事態に比べれば被害はずっと小さい。[……]」と述べた。(『朝日』3.12夕p5)

[23] 磯崎氏は「メルトダウン(炉心溶融)の可能性があるので早く蒸気を出さなければいけないという緊迫した状況で[……]」と指摘した。(『朝日』3.30 p.4)

[24] 保安院も燃料が溶けて圧力容器の底にたまる「メルトダウン」が1号機で起きた可能性が否定できないとしている。(『朝日』5.12 p.1)

[22]は説明もなくこの語が使われ、[23]は漢語の「炉心溶融」を()内に示して補足し、[24]は「」に入れてこの語がなじみのない語であると示している。

これらも、「炉心溶融」と同じようにまとめると以下ようになる。

- ① メルトダウン」と「 」がつけられているもの。
- ②「メルトダウン (炉心溶融)」と、「 」がつけられ、言い換え語炉心溶融とともに「 」に入れられているもの。
- ③ メルトダウンが「 」なしで使われているもの。
- ④ メルトダウン (炉心溶融) が「 」なしで使われているもの。

さらに、それらの語の前後に意味の記述があるものとなないものの2とおりがある。また、比喩や書名でこの語が使われている例もあるので、それらも合わせた「メルトダウン」の使われ方を表5に示す。

表5 「メルトダウン」の語の使われ方

使われ方		3月	4月	5月	6月	計
①「メルトダウン」 説明アリ	『朝日』	0	0	3	0	3
	『読賣』	1	0	1	0	2
①「メルトダウン」 説明ナシ	『朝日』	0	1	0	1	2
	『読賣』	0	0	1	0	1
②「メルトダウン (炉心溶融)」 説明アリ	『朝日』	0	0	0	0	0
	『読賣』	0	1	0	0	1
②「メルトダウン (炉心溶融)」 説明ナシ	『朝日』	1	0	0	0	1
	『読賣』	0	0	3	0	3
③メルトダウン 説明アリ	『朝日』	0	0	6	2	8
	『読賣』	0	0	1	0	1
③メルトダウン 説明ナシ	『朝日』	2	3	40	6	51
	『読賣』	0	0	6	0	6
④メルトダウン (炉心溶融) 説明アリ	『朝日』	0	0	0	1	1
	『読賣』	0	0	3	0	3
④メルトダウン (炉心溶融) 説明ナシ	『朝日』	0	0	1	1	2
	『読賣』	0	0	10	3	13
⑤溶融 (メルトダウン)	『朝日』	1	0	3	0	4
	『読賣』	0	0	1	0	1
⑥メルトダウン・解説	『朝日』	0	1	2	0	3
	『読賣』	0	0	1	1	2
⑦メルトダウン・比喩	『朝日』	0	0	0	1	1
	『読賣』	0	1	1	2	4
⑥『メルトダウン』小説名	『朝日』	0	0	4	0	4
	『読賣』	0	0	0	0	0
	『朝日』計	4	5	59	12	80
	『読賣』計	1	2	28	6	37
	総計	5	7	87	18	117

全体として言えるのは、『朝日』のほうが「メルトダウン」の使用が多く、『読賣』の2倍以上になっていることである。

「炉心溶融」と「メルトダウン」の出現数の関係を両紙で比較してみると以下の表6ようになる。全体数としては「炉心溶融」の方が多いが、5月、6月の『朝日』ではメルトダウンの方が多くなっている。それを疑ったり、その危険を回避する方法などを論じていた3月、4月には「炉心溶融」の方が使われていたが、実は3月にそれが起こっていたことを正式に東電が認め、事実であったとわかって以後の報道では「メルトダウン」の使用に傾いているのである。『読賣』はどの時期にも「炉心溶融」のほうをより多く使っている。

表6 新聞別「炉心溶融」と「メルトダウン」の出現数

	3月		4月		5月		6月	
	『朝日』	『読賣』	『朝日』	『読賣』	『朝日』	『読賣』	『朝日』	『読賣』
炉心溶融	39	37	16	3	33	45	11	16
メルトダウン	4	1	5	2	59	27	12	7

言い換えの扱いの有無では、「炉心溶融（メルトダウン）」は前述の通り、27例（『朝日』10：『読賣』17）であったのに対して、「メルトダウン（炉心溶融）」は24例（『朝日』4：『読賣』20）で、全体数では大差はなかった。しかし、『読賣』が「メルトダウン（炉心溶融）」を『朝日』の5倍も多く使用をしているのが目を引く。『読賣』のほうが漢語に対する外来語でも、外来語に対する漢語でもいずれも語の置き換えをすることが多いということである。

また、用法から見た場合、この語は、[22][23]や以下の[25]のように会話の中で使われることが多いことに気づく。

[25] 細野首相補佐官は3日、「事故発生直後は本当にメルトダウンの危機的状況を経験した」とも語っており[……]（『朝日』4.05 p.4）

さらに、この語のみの用法で炉心溶融にないものとしては比喩用法がある。

[26] G7はG20を経てGゼロへとメルトダウンしていくのが[……]
(『讀賣』4.28 p.29)

と、組織などが弱体化して消滅に至る状態の比喩として用いられる例は、ほかに「党内みんなメルトダウン」(『讀賣』5.20 p.3)「政治のメルトダウンを見せつけられた」(『朝日』6.03 p.38)などあり、計5例採集された。「炉心溶融」にはこのような比喩として使う例はなかった。

「メルトダウン」が、会話の中で、また比喩として使われるということは、この語の認知度が高くなったこと、また日常のことばとして使いやすくなったことの証明でもある。こうした動きからみると、この外来語の使用率が、漢語「炉心溶融」を上回る時が近いことが予想される。

一般的に外来語は明るい・おしゃれ・軽い・新鮮等のイメージがある。「炉心溶融」は、耳で聞いてもすぐには理解しにくい漢語である。また、文字を見ると、炉の中心部が溶けてしまった、という恐ろしい忌避すべき事態を包み隠さず表現している。こうした事態に目を背けなくなる心情も働く。そうになると、少し軽くて、明るい感じの外来語の方が使い易いということになるかもしれない。しかし、そのことはまた、ムードに流されて曖昧になり、事の本質がぼかされてしまうという外来語使用の危険性に対する警戒心も喚起させる。

おわりに

スペースの制約でわずか4語しか検証できなかったが、新しい語が使われ始めてから市民権を得るまでの過程を検証した。これらの語はそれぞれの辞書が次回改訂される際には、採録されたり、また語義を書き換えたりされるであろう。原発事故によって創り出され、使い始められたさらに多くの用語についても同じような検証を行い、稿を改めて報告したいと考えている。

事故を矮小化すると叱正されるのを承知の上で、あえて自分の身に引きつけて言うのであるが、事故さえなければ、知らなくてもすみ、使わなくても

すんだ多くのことばを自らの語彙に取り入れさせられた無念さを決して忘れないでいたいと思う。

参照辞書

『三省堂現代新国語辞典第4版』（三省堂2011）

『新選国語辞典第9版』（小学館2011）

『大辞林初版』（三省堂1988）

『大辞林第2版』（三省堂1995）

『大辞林第3版』（三省堂2006）

『広辞苑第5版』（岩波書店1998）

『広辞苑第6版』（岩波書店2008）

『日本国語大辞典初版』（小学館1972）

『日本国語大辞典第2版』（小学館2001）

『大漢和辞典修訂第2版第2刷』（大修館書店1991）

『現代用語の基礎知識』1979年版～2011年版（自由国民社1979-2011）

（えんどう おりえ）